

## ⑬ 北鎌倉周辺の紅葉を散策する資料 2019年11月27日 島田

### <鎌倉五山>

鎌倉時代後期に入ると禅宗が入り、普及するようになり五山制度が導入された。

五山制度は、インドに始まり中国南宋に伝わり、禅宗の保護と統制の目的で定めた寺格の一つである。寺格というのは、寺院の社会的な地位や、宗教的な地位を鑑みて、政府が認めた寺院の格式のことである。

その制度に適合した5つの寺院（(巨福山(こふくざん) 建長寺、瑞鹿山(ずいろくさん) 円覚寺、亀谷山(きこくさん) 寿福寺、金宝山(きんぼうざん) 浄智寺、稻荷山(とうかさん) 浄妙寺)を鎌倉五山という。因みに京都五山は、天龍寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺である。

### 『円覚寺』



鎌倉幕府は、元寇と言われるモンゴルの来襲にあい、敵味方ともに多くの死者を出す。時の執権であった北条時宗は、こうした多数の死者を悼むために円覚寺を作らせた。北条時宗は、犠牲になった日本の武士はもちろん、敵であるモンゴル人も分け隔てなく葬った。円覚寺は室町時代から江戸時代にかけて何度か火災で被害を受けている。江戸時代後期には僧堂や山門などの伽羅が復興し、現在の円覚寺の基礎を作り、鎌倉禅宗文化の中心的な存在となる。

### <総門>

山号の「瑞鹿山(ずいろくさん)」の額が掲げられている。初代住職、無学祖元(むがくそげん)の創建・開堂にあたっての法話を聞こうと、山中から白鹿が出てきてこの門に連なったことから、この名がつけられたという。

### <山門>

夏目漱石の『門』にも描かれている。桜上には十一面観音・十二神将・十六羅漢像が安置されている。山門は三門とも書かれ三解脱門(さんげだつもん)の略です。

### <弁財天>

北条貞時は鎌倉時代の名工として知られる物部国光に洪鐘(おおがね)の鑄造を依頼したが、あまりの大きさに鑄造を2回失敗してしまう。そこで貞時は、7晩に渡って江の島弁財天に成功を祈願。すると、3度目の鑄造でようやく洪鐘が完成した。弁天堂は、この成功に感謝して造られた。

### <梵鐘>

約720年前のもので洪鐘(おおがね)と呼ばれている。装高259.4cm・口径142cmで、鎌倉時代の代表的な形態を表す梵鐘である。建長寺の梵鐘とともに、国宝に指定されている。

### <仏殿>

仏殿は関東大震災で倒壊し、その40年後鉄筋コンクリート造で再建された。堂内には本尊の宝冠釈迦如来像や梵天・帝釈天像などを安置する。天井画の「白龍図」は前田青邨監修で日本画家守屋忠々志が描いたもの。

＜妙香池＞創建当初からある池で、2000年に方丈裏庭園と合わせて自然な姿に復元された。もともとは僧侶であった夢窓疎石が手がけた庭で、自然の美しさを感じる木々が植えられている。境内では屈指の紅葉の名所で寝そべったトラの横顔に見えることから、虎頭岩と名付けられた岩がある。

＜方丈＞約100体の小さな観音像が並んでいる。ここを詣でれば、100か所の観音詣での御利益があるという。ひとつずつ手を合わせる人も多いとか

＜舍利殿＞入母屋造、柿（こけら）葺き。一見2階建に見えるが一重裳階（もこし）付きである。裳階（もこし）とは、仏堂、塔、天守等で、軒下壁面に付いた庇状構造物。堂内中央には源実朝が南宋から請来したと伝える仏舍利（釈尊の遺骨）を安置した厨子があり、その左右に地藏菩薩像と観音菩薩像が立つ。

松嶺院の境内には俳優の佐田啓二、田中絹代、作家の開口健、弁護士の坂本堤の墓がある。有島武郎が、小説「有る女」後編を執筆したとき、1ヶ月滞在したところでもある。



山門



梵鐘



仏殿



舍利殿

### 『浄智寺』

鎌倉幕府第5代執権北条時頼の三男である北条宗政が亡くなった折、その菩提を弔うために創建された。当時は中国（宋）からの渡来僧も多く、最盛期には七堂伽藍を備え、11塔頭（ずとう）に総員500名を擁する大寺院だった。江戸時代まで規模を維持していたが、関東大震災でそのほとんどを消失し現在の建造物は概ね昭和に再建された。

#### ＜山門＞

円覚寺開山の無学祖元の筆とされる『寶所在近（ほうしょざいきん）』の文字が掲げられ深い木々に囲まれ、浄智寺を象徴する石段が伸びている。また、門の手前には鎌倉十井の一つ「甘露の井」がある。



山門

#### ＜鐘楼門＞

鎌倉では珍しい唐様である。「山居幽勝」（さんきょゆうしょう）の額が掲げられ鐘つき堂を兼ねた山門で、1階には山門があり、2階には花頭窓という花形の印象的な窓と梵鐘が下げられている。

#### ＜曇華殿（どんげでん）＞

御本尊は室町期作の木像三世仏坐像である。左から『阿弥陀・釈迦・弥勒』の各如来で、『過去・現在・未来』の時を象徴している。各如来は衣の裾を台座に長くたらしした様式で、鎌倉仏の特徴をよく表している。

「曇華殿(どんげでん)」の名は、三千年に一度だけ咲く伝説の優曇華(うどんげ)の花に由来している。また、曇華殿後ろには鎌倉三十三観音霊の一つ観音菩薩像が祀られている。



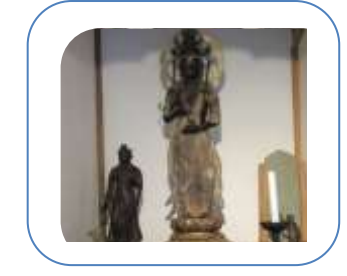
鐘楼門



曇華殿



木像三世仏坐像



観音菩薩像

## 『海蔵寺』

鎌倉幕府六代将軍宗尊親王(むねたかしんのう)の命によって、七堂伽藍の大寺を建立されたが、鎌倉滅亡の際の兵火によって全焼してしまった。



薬師堂

並んでいる。

室町時代になって、関東管領・足利氏満の命により再興。薬師如来を本尊とする大寺で盛時には谷戸一帯に塔頭が立ち並ぶ程であったが、今はことごとく廃絶してしまった。

### <薬師堂>

中央には、本尊の薬師如来坐像が安置され、その両脇に日光菩薩像と月光菩薩像、さらにその脇には十二神将像が

薬師如来坐像は「啼薬師(なきやくし)」や「児護薬師(こもりやくし)」と呼ばれ、胎内に「毎晩のように裏山から赤子の泣き声が聞こえるため、その場所を掘ったところ出てきた」と伝わる仏面が納められている。

### <底脱ノ井>

鎌倉時代中期の武将、安達泰盛の娘・千代能が、ここに水を汲みに来て 井戸の水を汲んだところ、水桶の底が脱けたため、「千代能が いただく桶の 底脱けて 水たまらねば 月もやどらず」と謡ったことから、底脱の井という名がついたと言われている。

歌の真意は、「心の底が脱けて、わだかまりがなくなり、悟りが開けた」というものです。

### <十六ノ井>

洞窟内に掘られた井戸。地面には整然と並ぶ直径70cm・深さ50cmほどの16個の穴あり、それぞれから水が湧き出ている。洞窟正面の壁には観音菩薩像と弘法大師像が祀られている。本来は、井戸ではなく、納骨のためのものとの説もある。

### <山水庭園>

十一面観音が安置されている本堂の裏手に庭園がある。左脇の小路を進んでいくと左手に「やぐら群」があり人頭蛇身の宇賀神が祀られている。奥の正面には観音菩薩立像が祀られている。



底脱ノ井



十六ノ井



本 堂



山水庭園

## 『英勝寺』

鎌倉唯一の尼寺である。

開基の英勝院尼は、三代将軍家光から太田道灌の土地を譲り受け、英勝寺を建立した。没後は、徳川水戸家の姫が代々住職を務めた。英勝寺は「水戸御殿」や「水戸の尼寺」とも呼ばれる程、格式の高い寺で、三つ葉葵と太田家の紋が掲げられている。

英勝寺は花の寺としても知られ、春には竹林に白藤、初夏にはあじさい、秋には彼岸花や紅葉、冬には柊や水仙と、季節によってさまざまな草花が楽しめる。

### < 祀堂（しどう） >

英勝院の位牌を祀る建物で、徳川頼房の子・徳川光圀によって建立されたと伝わっている。内外共に華麗な色彩装飾が施されている。墓石は裏にあり山の壁面にある仏像が墓石を守っている。

### < お 梶 >

お梶は、太田道灌の孫で徳川家康に仕えた。関ヶ原の戦いにお供をして勝利を収めるので、徳川家康から「梶を勝と改めよ」といわれ、以後お勝の方（局）と呼ばれ、家康との間に生まれた市姫が4才で亡くなると、水戸徳川家の祖となった徳川頼房の養母となった。

家康が晩年を過ごした駿府城では、質素儉約につとめ家康の信頼も厚く、家康から男なら大名にも取り立てられるものと言われたほどの人物であった。家光が三代将軍になれたのも、お勝の方が春日局を家康に会わせたからだと言われている。

家康が亡くなると英勝院と号したが、水戸徳川家はもとより、二代将軍秀忠と特に三代将軍家光の信頼を得、寛永十九年死去すると英勝寺裏山に葬られた。

### < 総 門 >

徳川頼房の子・松平頼重が英勝院の一周忌のために建立したと伝わっている。

扁額「英勝寺」は、後水尾上皇宸筆によるもの。関東大震災で全壊したが、2011年に落慶供養が行われた。禅宗様と和様を組み合わせた二階二重文門で屋根に反りが無く真っ直ぐ葺き下ろされ、初層軒下の蛙臺門には、龍を始め八種からなる彫り物が施されている。

上層内には阿弥陀如来、観音菩薩像、勢至（せいし）菩薩、その周りに十六羅漢像が安置されている。

< 鐘 楼 >は、総門と同様に英勝院の一周忌のために建立された。鎌倉では英勝寺にしかない袴腰造の珍しい様式である。

### < 仏 殿 >

英勝院によって建立され、徳川頼房が英勝院の1周年忌のために改築して現在の姿になった。軒下には仏殿では珍しい十二支の装飾彫刻がある。

堂内には、徳川家光が寄進した運慶作の本尊・阿弥陀三尊立像が安置されている。正面の子窓を開けると見ることができる。天井には、極採色の鳥や天女の絵が施されたほか、水戸徳川家の三つ葉葵、太田家の桔梗などの装飾が施されている。





英勝院



総門



鐘楼



仏殿

### 『寿福寺』



石畳

源頼朝が没した翌年の1200年、妻の北条政子が明庵栄西を開山に招いて創建した。創建当時は七堂伽藍を擁し、14の頭塔（ずとう）を有する大寺院であったが、1258年の火災で一字を残さぬまで焼失した。禅刹として体裁を整えたのは1278年頃と推定されている。仏殿は1664年（寛文4年）の再建であり、お堂は、江戸時代に再建されたものである。

#### <石畳>

総門を潜ると中門まで、まっすぐに伸びている参道は、鎌倉で「最も美しい石畳」と言われている。この独特な形状は、桂（かつら）敷きという技法のものである。

#### <総門>

門前の石柱には寺号である「壽福金剛禅寺」が刻まれており、門には山号である「亀谷山（きこくさん）」の額が掲げられている。

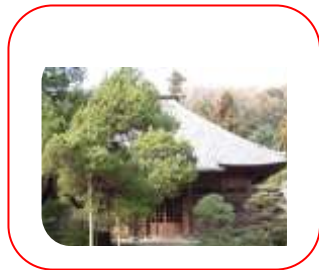
#### <仏殿>

お正月とGWなど年に数回しか一般公開されないが、中央にある、高さ2.7mの釈迦如来坐像は、鎌倉時代には珍しい脱活乾漆造（だっかつかんしつぞう）という技法で作られた、極めて貴重なものである。他にも、釈迦如来坐像と組みになっている木造の文殊菩薩像と普賢菩薩像や、鶴岡八幡宮から移されたという仁王像などが祀られている。普賢菩薩像は鎌倉十三仏の一つに数えられている。

寿福寺には、「源実朝」、「北条政子」「高浜虚子」「大佛次郎」のお墓がある。



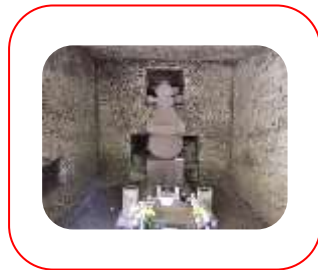
総門



仏殿



北条政子のお墓



源実美の五輪塔